

令和7年度組織目標 知事協議概要

部 局 名	農政水産部
日 時	令和7年(2025年)4月21日(月) 14:15~15:15
場 所	特別会議室
出 席 者	知事、東副知事、岸本副知事、知事公室長、総合企画部長、総務部長、総務部管理監 部長、次長、技監(みらいの農業振興課長事務取扱、みらいの農業振興課みどりの食料戦略室長事務取扱)、技監(農村活性化推進担当)、技監(農業農村整備担当)、農政課長、農政課農業団体指導検査室長、みらいの農業振興課地域農業戦略室長、みらいの農業振興課食のブランド推進室長、畜産課課長、水産課長、水産課主席参事(水産改革担当)、耕地課長、農村振興課長、農村振興課地域資源活用推進室長

発言者	発言概要
総務部長	農地所有者の方の高齢化も進み、人数も少なくなってきたり、水路の維持管理作業など継続していくのが難しいのではと感じるが、農業基盤の維持のために工夫されていることはあるか。
技監(農業農村整備担当)	担い手や地域の方が高齢化し、維持管理作業が大変だという声は滋賀県全土で聞こえてきている。このような中で、草刈りや泥上げが大変という声に対して、滋賀の特徴である生態系に配慮ということを考えてつつも、草刈りなどが不要な水路づくりとして、排水路などもパイプラインにして、乗用の草刈り機で刈れるような、管理の省力化を意識した基盤整備に着手していきたい。具体的には、中山間の甲賀でモデル地域を1つ立ち上げて、うまくいけば広げていきたい。
技監(農村活性化推進担当)	ハードの取組に加え、整備が済んでいるところは、いかに次世代に農業・農村を健全な姿で引き継いでいくのが、大切。中山間地域だけでなく、平場においても人口減少が進んでいる中、地域を支える活動をしてくれる担い手の確保については従来から進めているところ。今後更に都会の方に対して魅力を発信しながら、都市と農村の交流を進めるなど、滋賀の農村ファンを増やす取組を進めたい。
総務部長	地元の意見も聞きながら進めてほしい。
総務部長	温暖化等への対策で米や野菜など品種改良に努力いただいているが、畜産への影響、例えば肉質への影響はあるか。影響があるならば、改善や緩和する方法はあるか。
畜産課長	近江牛への影響としては、暑さで餌を十分に食べられない、休息ができないというところで肥育や肉質への影響が考えられる。そういったことへの対処として、今年度は、例えば大型扇風機を畜舎に増設するといった対応ができる事業を実施している。こういった事業を活用していただいて、生産コストを下げる、生産効率を上げていく取組を進めていきたい。
知事公室長	学校給食について流通のモデルを作りたいということについて、家庭や外食では食べないが、学校給食で湖魚を食べたよ、美味しかったよ、と子どもが良い語り部になっており、そういった経験を増やしてほしい。子どもはまさに将来の担い手や購買者になるので、これが大切だが、具体的な取組があれば教えてほしい。
みらいの農業振興課食のブランド推進室長	学校給食は、子ども達の食生活の基盤、地域や農産物への愛着をつくる大きな取組と考えている。今年度は、食育の観点から、できるだけ多くの農畜水産物を活用し、特に野菜を学校給食で拡大する取組をもらえる市町を募集し、甲賀市と大津市を選定した。両市には、県内でモデルとなるような今以上の取組をやっていただいて、年末に発表してもらい、県内市町にも聞いてもらう予定をしている。
知事公室長	市町独自の取組もあると思うので、発信する際には一緒に取り組んでほしい。
みらいの農業振興課食のブランド推進室長	この事業は市の教育委員会をはじめ、生産者団体や流通販売事業者なども入っていただいてコンソーシアムの形で取り組むことを前提としており、できるだけ広く多くの方に関わっていただいて、みんなと同じ方向を向いて取り組みたい。
知事	予算の使途は。

発言者	発言概要
みらいの農業振興課食のブランド推進室長	ソフトの取組に加え、新しい品目の栽培試験や、流通に係る経費や給食側の機械導入などのハード面も含め、生産から供給に至るまでの課題について話し合い、それをクリアするために必要な経費に対して助成する。来年度以降も予算要求していきたいと考えており、他の市町も次年度以降、取り組んでもらいたいと考えている。
知事	これについては別途協議しよう。スケジュールを含め、何年でどこまでいくのか。何を滋賀県として目指すのか。滋賀県の学校給食は理想としては地産地消100%。そうするためにどんなことが必要なのか、どんな取組ができるのか議論しよう。どうやって打ち出していくのか、滋賀県に住みたい、住ませたいと思わせる取組にしたい。琵琶湖システムとからめてやるべきで、それが人材育成にもつながる。滋賀の子は滋賀の食で育てる、最重要課題であり、大きく考えよう。
知事公室長	「おいしが うれしが」の登録事業者数が目標にあがっているが、どう取り組んでいくのか教えてほしい。
みらいの農業振興課食のブランド推進室長	地産地消を推進するキャンペーンとして、15年ほど前から進めてきた。県内の多くの事業者に入ってもらっており、最近は県外からも登録いただいている。そこをさらに開拓していくために今年どうしていくのか、今後のテコ入れについて部内で十分検討したい。
総合企画部長	CO2ネットゼロに資するバイオマス利活用の推進とあるが、これについて見込みなどはどうか。
農政課長	大きく2つ取り組んでいる。1つが、エネルギー作物の生育調査による栽培管理支援や農業用暖房への活用検討として、「エリアンサス」と「ジャイアントミスカンサス」という植物を昨年度に植えたところだが、収穫までは3年ほどかかる。現在は、どういった栽培方法が良いのかなど、竜王町と研究しているところ。これがどのくらい獲れるのかについては、文献では1ha当たり25tといった数字がある。米の栽培が難しいところなどでつくれると良いが、まだ研究中という段階。 もう1つは、ダイハツにつくられているテストプラントだが、家畜のふんから採ったメタンガスは工場で利用し、残った堆肥のところをどのようにほ場で活用するか研究しているところ。
総合企画部長	エネルギー作物について、将来的にどのくらいの面積にするとか、いつ頃までにというものはあるか。
農政課長	明確には無いところだが、荒廃農地に植えていける、手をかけずに作っていけるというのは大きなメリット。そういったところに広げていけるよう研究しているところ。
総合企画部長	まず実験していることを広く発信して、一緒にやる人を増やしてほしい。
総合企画部長	アユについて、気候変動がしばらくはこのまま進むとすれば、農作物であれば品種改良があるが、アユでも品種改良といったことはあるのか。
水産課長	アユの品種改良は難しい。気候変動に対してはリスクヘッジがポイントと考えており、一気に放流するのではなく、1か月ほどかけて対応していく。また要因については、今年度から3年間、アユの生活史をシミュレーションして対応策をつくっていく。分散だけでなく、効率をあげる放流の仕方なども研究していく。
総合企画部長	せっかく放流してもタイミングがあるのであれば、そもそも高温に耐えられる品種について研究しても良いのではないかと思うがどうか。
水産課主席参事	琵琶湖のアユは天然資源であり、品種改良したものを琵琶湖に放流できない。養殖池の中で生涯を通じて育てる魚であれば品種改良も可能ではあるが、天然資源であるため、むしろ気候変動に対応した増殖の仕方を探ることに力を注ぎたい。
総合企画部長	他に研究されているところはないのか。
水産課主席参事	天然資源の場合は、品種改良で対応していくことはできない。養殖魚であればあり得るが。
知事	今は取れていないのか。
水産課主席参事	残念ながら、不漁が続いている。

発言者	発言概要
知事	自然のことなので分からないが、獲れないなら獲れないと言えば良いし、いないならばいないと言えば良い。
水産課主席参事	調査に基づいて、資源が少ないことは少ないと伝えている。今後の見込みについては、皆さん関心を持っているので、今の時点で言えることを伝えているところ。過去の不漁の時の状況を見てみると、だいたい5月になれば不漁であった年も獲れはじめている。4月から5月になり、獲れ始めるかどうかのタイミングなので、頻繁に漁業者のところに足を運び、情報を集めて分析しているところ。
知事	状況については、また教えてほしい。
岸本副知事	中長期的に見たときに、女性が農村でずっと主体的に輝けるということが、その地域に女性が残っていく上でのポイントになると思う。女性の認定農業者等の確保があげられているが、特に女性に着目して残ってもらうための取組としては何があるか。
みらいの農業振興課地域農業戦略室長	滋賀県の状況として、女性の認定農業者の割合は全国の平均から比べると少し低い。まずは、女性に経営に参画してもらえるよう、活躍している女性農業者の方との交流会や農業経営に関する連続講座を開催していく。併せて、男性も含めた、女性の参画についての意識改革・醸成も進めていく。
知事	以前に、滋賀の農業女子といった取組があったと思うが。
技監(みらいの農業振興課長事務取扱)	農業女子100人プロジェクトというものがあったが、昨年度末に解散している。解散して、組織としての活動はされていないが、出来たつながりは保っている。組織にすると世話役の負担が大きいので、行政としては、先輩農業者と若手の交流など、女性同士がつながれる場づくりや、機会の提供を行っていく。そこでつながりができれば、後はそれぞれつながっていくという形で進めている。
岸本副知事	ちょっとしたことでアドバイスしてもらえる関係やネットワークはとても大切。さらに言えば、農業に限らなくても良いのかもしれない。商工観光労働部の女性の活躍ための取組と組み合わせても良いかもしれない。
東副知事	琵琶湖システムの価値や魅力発信についてあげていただいているが、できるだけ分かりやすく伝えていただきたい。販売につながる訴求の仕方を考えてほしい。もし考えていることがあれば。
農政課長	「びわ湖魚グルメ」という名称で、びわ湖の魚と農産物を掛け合わせて新たなメニューを作ろうということで令和5年度から取り組んでいる。いろんな料理やお店を通じて、滋賀県の魚や農産物の魅力を知ってもらいたい。併せて、掲載している参加者にはセミナーを開催し、お客様にも伝えてもらうことも考えている。また、インスタグラムの活用については、インスタグラマーの方に自身のフォロワーにも広げてもらえるような取組として、モニターキャンペーンも行っており、様々な魅力を、様々な方の力を借りて広げる取組をしており、今年度も継続して実施する。
東副知事	メニューとしての魅力もあるが、琵琶湖システムの価値といったものも見える化して伝えることはできないか。
農政課長	びわ湖魚グルメの冊子では、最初にページを割いて、世界農業遺産「琵琶湖システム」や滋賀の農産物・水産物の魅力を紹介している。また、びわ湖魚グルメ事業では、参加者へのセミナーを開催しており、単に料理だけでなく琵琶湖システムについてもお伝えし、利用者に広めてもらえることもお願いしている。
東副知事	環境に与える価値などをデータの形で見えるものはあるか。
農政課長	子ども向けの学習教材も作っており、うみのこの事前学習などに使用してもらっている。また、作成した学習動画をホームページでも掲載しているところ。
東副知事	分かりやすいように伝えてほしい。
技監(農村活性化推進担当)	琵琶湖システムの活用については、ツアーをもっと頑張りたい。食べる、体験する、泊まるの3本柱の農泊について、地域資源の観光コンテンツとしての磨き上げや魅力の発信、観光客を受け入れる地域の体制整備、モニターツアーまでできればと考えている。「しがのアグリツーリズム」という名で昨年度から取り組んでおり、積極的に推進していきたい。

発言者	発言概要
東副知事	昔から耕畜連携は進めてきており、肥料など資材価格が高騰している中では、重要な取組と思うが、何か工夫してやれるところはあるか。方向性などあれば。
畜産課長	家畜ふん堆肥について、多くは稲わらと交換して近江牛の餌の確保に活用されている。今年度は拡大していくための事業を予定している。また、県では「家畜排せつ物の利用の促進を図るための計画」というものを策定しており、令和8年度の改定に向けた作業に入るが、そのほかの耕種農家でも活用してもらえるよう計画を策定していきたい。具体的取組については、みらいの農業振興課と連携して検討していく。
東副知事	家畜ふん尿については、ほぼ利活用されている状況か。
畜産課長	自分のところで活用するか、耕種農家で活用してもらうか、というところでほとんど使われている状況。
知事	<p>先週、イチゴ農園に行ったが、普及指導員の方にとってもお世話になっているという話を聞いた。やはり普及指導や生産者に寄り添うスタッフはすごく大切だと感じた。また、農業技術振興センターも訪問したが、技術研究も大事であると感じたし、若手が精力的に頑張ってくれており、とても心強かった。</p> <p>「みおしずく」を改良し、あまおうなどと同様に首都圏や海外にという話がある方にしたら、高い運搬費や沢山のCO2を出して遠くに出すのは間違いではないか、むしろ地産地消で食べたいなら来てくださいというのが滋賀の農政らしくはないかと言われた。長い時間と多くの予算やマンパワーをかけてやる研究について、どの分野で、どれくらいかけて行うのか、よく議論して決める必要があるのではと思った。今やっていることはとても意味のあることで、頑張ってくれているが、大きな経営判断や世界観が必要ではないかと思う。水産も畜産も同様。</p> <p>食の力、食べるものを作る力は基本。本県は魅力的なもの、大事なものを持っており、より強く、持続的に伸ばしていけるようにしたい。そのために、生産額にはこだわりたい。どのくらい生産してて、どのくらい付加価値をつけられていて、それらはどのくらい伸びてるのか伸びてないのか、一次生産だけでなく加工生産も含めて、生産額にこだわった農畜水産行政をやりたいので、そこに向けて皆さんの力を結集していく。</p> <p>琵琶湖システムはやはり滋賀が誇るコンテンツだと思う。学校給食やその中での学び、国スポ弁当やメニューブックも良いと思う。国スポ・障スポ、万博もあるので、この機に発信を強化したい。フォロワー数以外にも何かメルクマールがあるのではないか。</p> <p>米、牛、鮎について、今どうなっていて、今後どうなるのか、どうするのか徹底的に議論し、高めていきたい。</p> <p>そのためには、やはり人材。農業高校と農大が連携して、人材育成に力を入れるというのはとても大事であり、どこで何を、誰がするのか。</p> <p>また、技術については、普及指導や何を研究するのか、みんなで考えたい。</p> <p>中山間や地域の集落について、誰が農業を担ってくれるのか岐路にあるように思う。しがのふるさと支え合いプロジェクトのバージョンアップについて期待したい。企業に参画いただいて、例えば、集落営農でもモデルとなるようなものが作れたらと思う。</p> <p>農業分野のジェンダーについて、そのバイアスをどう変えていくのか。同じ問題意識を持つる人たち集め、例えば2040年ぐらいを指向して、挑戦ができるとよいと思う。</p>
部長	男性の意識を変えていくということも重要で、農業者の研修会などで進めていきたい。
知事	商工観光労働部でもジェンダーの問題については色々取り組んでいくので、連携してやってみても良いのでは。その中で、中小企業と農業者の新たなつながりも生まれるかもしれない。
部長	農業者も大規模農家が増えてきており、経営上も必要な視点である。
知事	おそらく今年は米のひっ迫が去年より早いのではないか。それについては国だ、世界だと言わずに、先を見て、国に対しても言っていないといけないのでは。
技監(みらいの農業振興課長事務取扱)	100ha規模で大規模に経営される農家が増えているので、そうした稲作経営者会議や法人協会と意見交換もしていく。JAだけでなく大規模農家がどのように考えているかも聞きながら、今後のかじ取りをしていきたい。
知事	そういうことをやろうとしている、考えようとしているということを早め早めに県民の方に伝えていこう。安心してもらえりし、色々な知恵や意見も出てくると思う。